

その朝

悪夢——そうかも知れないし、そうでないかも知れない。夢ではなくて、現実の光景の再現だった。

帝都南西に位置するリゾート地ラキエンテス。そのラキエンテスからフロイデンにつながる山林地帯。ラキエンテスの水源カージタス湖^{ゼー・カージタス ほとり}の畔は霧の中だった。夜半以来から降り続いた驟雨の名残雨が降り続く中、気温も急激に下がっていたのだ。

ゲルタはそこにいた。

それまで、わたしはゲルタとは面識がなかった。でも、一目見た瞬間、彼女がゲルタに他ならないことを確信していた。

背の高い、燃えるような金茶色の髪、おとぎ話に出てくる妖精のような、細面で端麗な顔立ち。彼女がまとっていたのは園遊会用のドレスでもなかったし、西苑女官長府用のスーツでもなかった。

黒い戦闘服^{コンバットスーツ}。その右手には太刀^{ザムライクリンケ}のような長い戦闘ナイフが握られていて、そして、彼女はまっすぐにローエングラム公を見詰めていた。

「そこをどけ、シュミットバウアー」

ローエングラム公が怒って、それも半端な怒り方ではない。この方を本気で怒らせてただで済むはずはないのだ。

わたしは、何度か、ローエングラム公の怒りを買いかけた。失敗したことではない。敢えて、不興を買うように行動し、直言したのだ。も

ちろん、中途半端な覚悟ではダメだ。真つ正面から公の怒りを受け止めて、はじき返せる——ちよつと違つ気がする。弾き返すのではなく、怒るべきことではないと気づいてもらつた方が良いかも知れない。そついう覚悟と用意がなかったら、公に一言吼えられた瞬間、わたしでも部屋から逃げ出してしまつかも知れない。

初めて会つた瞬間、わたしは不思議に思つたのだ。どうして、この方は帝冠を戴いておられないのか、と。阿り^{おもね}でもないし、追従するつもりもない。金髪がそつ見えたといつたでもない。この人は帝王なのだ、と、ごく自然にそう思つたのだ。この人が、わたしたちを、まったく新しい帝国へ導いていってくれるだろうと、あの瞬間、わたしはそう確信したのである。そうして、訪ねる前に抱いていたローエングラム公、その時はまだ侯爵だったけれども——公に対する考えが間違つたものでないことを確認できたのだ。

ゲルタ——制止の声をかけようとして、彼女の声が、わたしの咽喉を凍らせた。

「私を殺してから」

ゲルタは言葉が無駄にしない女だ^{ひと}。わたしとのやり取りでも、無駄なことはほとんどしゃべらない。豊かで綺麗なアルトの声は、一言一言に思いを巡らせながら発していることがよく分かった。音声^{ボイス}メールをやり取りしたことは数えるほどだったけれども。

違つた人の声かと思つた。

同じ名前の、まったく違つた人物を、わたしは前にしているのかと一瞬思つたほどだった。

小説では、氷のような声とか、感情を完全に欠いた声だとか言つた表現をよく見掛ける。この時のゲルタの声はそつではなかった。

「私を殺し、あなたの姉と親友をお救いなさいな。でも、私を殺さない

では助けさせない」

確かに彼女の声だった。冷たくもなく、感情のないのっぺらぼうな声でもない。ごく普通の普段通りだろう声。そう、彼女はローエングラム公と戦うことに何の躊躇いも感じも抱いていなかった。

その瞬間、やっぱりゲルタだ——わたしは確信すると同時に、もう一度、叫ぼうとして前に踏み出していた。もう止めてください。あなたほどの女が、どうしてこんなことをするんですか。ローエングラム公に従うという選択は、あなたならできるはず——と。

「貴様、正気で言っているなら、正気でいることを後悔させてやるぞ」

ローエングラム公が叫び、銃を引き抜いた時、わたしは見た。ゲルタが微笑むのを。

「ゼツフル粒子です、閣下！」

シュトライト准将の叫び声。

わたしには分かった。強がっているのでもないし、無理をしているのでもない。まして、楽しんでいるのでもない。彼女にとっとうていどうしても為さねばならないことを、ただ為そうとしているのだ——と。

もどかしかった。

今の帝国はもう駄目なのだ。五〇〇年も続いたゴールデンバウム王朝だけれども、もうどうにもならないのだ。ここでローエングラム公個人を倒したところで、何も起こりはないのだ。いいえ。もっと悪い。門閥貴族を倒し、ゴールデンバウムの皇帝から実権を奪うことで、やっと再建の途についたばかりの帝国。その帝国がまた手のつけられない動乱のただ中に突き落とされてしまう。

でも——ゲルタにはそれも分かっている。彼女の声、表情、態度すべてがそれを現していた。分かっているなあ、彼女はローエングラム公に戦いを挑んでいる。

シュトライト准将が、ローエングラム公の右手に戦闘ナイフを握らせるのが見えた。

「——？」

公の左手がすつと伸びて、わたしの肩を軽く押す。押されて、半歩下がってから、公の意図が分かった。

ここへ来るヘリの中で公は私に言ったのだ。『仮にあなたが知り合いだったとしても、あの女は必要があればあなたの生命をも狙うだろう』。

そう——

わたしが公と彼女の間に飛び出して制止しようとしても、ゲルタは意にも介さない。わたしを楯にするか、それともあつさりナイフを揮ってわたしの生命を奪うかするに違いない。馬鹿なことは考えず、後ろに下がっている……というか、下がっていてくれ。

公の左手の動きがそんな風に語りかけてきているような気がして、わたしはそれ以上、何も言えず、何もできないままにすべてが終わるのを、ただ呆然と見詰めていたのだ。

そして——

「爆弾だ——!!」

キルヒアイス提督の叫び。

カラン、コロン、そんな風にしか表現できないような間の抜けた金属音。

「え——？」

転がってきたのは——人の腕!?

びっくりする暇もなかった。

ローエングラム公に腕を掴まれた時、目の隅でキルヒアイス提督がグリューネワルト伯爵夫人を抱き上げるのが見えた。そのまま、腕を引っ張られるままに坂を駆け下ったかと思うと、不意に身体が宙に浮いた。